

Close Up News

クローズアップ・ニュース

都 遊協青年部会「元気・パチンコ・Japan」プロジェクト 深刻な稼動低迷で急がれる 若年層呼び込み策の具体化

都

遊協青年部会と早大大学院研究室が中心となり、業界の将来像をさぐるために立ち上げた「元気・パチンコ・Japan」。この産学共同研究事業で、青年部会の日野元太代表は、「今のホールの厳しさを考えると、若者を中心としたファン層の開拓が急がれる」として、活動テーマを絞った集中的議論を開始した。

その具体化への第一歩として、12月28日に開催された会合では、若者層のパチンコへの呼び込み効果をみせているサミーの「マイスロ」について、同社研究開発本部の関係者を招き、開発経緯などのレクチャーを受けた。



12月28日に開催された会合では若年層の開拓をテーマに議論を行った

サミーのマイスロは、今さらいうまでもないが、携帯サイトとパチスロとの連携による、同社オリジナルのサービス機能だ。射幸性以外の部分でパチスロの「やりこみ要素」をプレイヤーに与えた結果、会員数は60万人を突破。多くのレジャー産業が若者の「ケータイ」文化に押され、消費活動を停滞させている中であって、若年層を今一度、パチスロに呼び込むために、その「ケータイ」と連携したサービス展開を図り奏功している。

当日は大野研究室の若年層を対象としたアンケート調査も公開。単純集計の段階で詳しい分析はまだ行っていないが、これらと組み合わせて、若年層の呼び込みを具体化していく方針だ。

2月に開催される全国青年部会の東京大会でも、これがメインテーマに掲げられるという。若いホール関係者らの手によって、効果的な若年層の呼び込み策が示されるか、注目したい。

リカバリーサポートが10年上半期の相談データまとめる

相談者の30%が低玉客 94%が問題ギャンブラー

電

話による相談をはじめ、ばちんこ依存問題の解決を支援するNPO法人リカバリーサポート・ネットワーク(RSN)が10年度上半期(4~9月)の相談事業データをまとめ、会報誌「さくら通信」の誌上で発表した。

これによると、4~9月の電話相談件数の合計は683件で、昨年同期比で57件の減少となった。このうち初回相談となる561件の相談を抽出したデータ

では問題を抱える本人の相談が71%、家族や友人からの相談が29%。相談経路では「ホール内のポスター」が318件で、「インターネット」の129件、「他の相談機関」32件と続いた。相談者の属性と相談経路を併せると、何らかの問題を抱える本人が、ホール内のポスターを見てRSNに相談するパターンが全体の約半数を占めたことになる。相談者がのめり込んでいる機種については、パチンコが57%

パチスロが15%、両方が25%という回答になった。遊技する貸し玉(コイン)料金については通常貸玉が56%と半数以上を占めたが、低貸玉が8%で、両方が21%、不明・拒否が15%。相談者の約30%は低貸玉を遊技していることになるが、同誌上では「低貸玉ユーザーにも(依存)問題があるユーザーが存在していることを認識しておく必要がある」と指摘している。

また、相談者に対して7項目の質問をし、該当項目1つで1点と計算。2点以上を問題のあるギャンブラーとする簡易評価を行っているが、平均は4.16点で2点以上の割合は約94%にのぼった。この点数と一カ月あたりの遊技代との相関関係を調査した結果、必ずしも金額が多いほど点数が高くなるわけではないことを指摘し、「金額の大小で問題のあるギャンブラーか、あるいは問題レベルが深刻かどうかは判断できない」とした。